

## とがち 十勝の農業の歴史 ～経済的な観点での考察～

### はじめに

十勝は、北海道の背骨である日高山脈の東側に位置する、農業とその関連産業を基幹産業とする地域です。現在では我が国最大の畑作・酪農の生産地域として揺るぎない地位を確立しておりますが、原始の姿そのままの十勝内陸部への本格的な「和人」の入植は、たった130年ほど前の出来事で、その後昭和期半ばまでは、本当に貧しい時代が続いておりました。

このような短期間で、高い生産性を誇る十勝農業がどのように形づくられてきたのか、土地改良の側面に光を当てつつご紹介したいと思います。



丘陵地における大規模草地  
生乳生産量の全国シェアは約14%



高台から望む十勝平野の広大な畑地帯  
普通畑面積の全国シェアは約15%

### 明治期の開拓を担った人々 ～資本主義のあおりを受けて～

封建的な徳川時代が終わり、明治政府の富国強兵・殖産興業の下、農民が農地に縛られなくなった一方で、地租改正などの農業施策や資本主義の浸透、さらには松方デフレなどによって農民層の富農と貧農への分解という構造的な変化が促進され、生活に窮した貧農がやむを得ずわずかな土地や家財を売って離農するという現象が日本中で起こりました。十勝の開拓を担ったのは、このような経済的に行き詰まった人々や、自然災害により郷土が壊滅的打撃を受けて移住を決意した人々でした。

貧しい農民が一家を挙げて、農地を継承できない次男三男が一念発起して、村を挙げての集団移住、結社・会社による事業としての開拓、内地で小作人を募集した不在地主による大農場、など入植の形態は多様で、開拓使（明治19年からは北海道庁）に届出せずに入植した無願開墾も多かったようです。また、内地での借金により小作人になることを余儀なくされたケースもありました。

明治期の北海道の開拓といえば、官主導の屯田兵によるものが各地で見受けられますが、十勝に屯田兵が駐屯することはなく、十勝の開拓は主に民間の移民により進められました。

## 初期の入植地 ～河川沿いの肥沃地～

十勝内陸部の本格的な開拓は、明治16年(1883年)、晩成社(静岡県)の副社長である依田勉三よだべんが率いる移民団の帯広入植によって始まりました。壮絶な辛苦を重ねたにも関わらず晩成社の事業は失敗続きでした。しかし、畑作だけでなく様々な事業を手がけ、十勝の産業の礎を作った功績は大きく、依田勉三はいまでも「拓聖」として奉られています。

十勝平野の大部分は広大な高台(河岸段丘や丘陵地)ですが、その多くは火山灰が厚く堆積し、石が無く樹木も少ないため開墾しやすいものの、酸性・過湿で土地がやせており、肥料に乏しい状況下では十分な収穫は得られない上、生活用水にも苦勞するところでした。

一方沖積地は、肥料を施さなくても比較的良い収穫を得られたため、明治30年ころまでの初期の開拓民は、主に河川沿いの肥沃地に入植しました。しかしそこは、道具や畜力に事欠く中で、生い茂る巨木に阻まれ開墾が遅々として進まず、元々が十勝川とその支流の氾濫原として形成された土地であるため常に洪水の危険が伴い、ひとたび河川が氾濫すると築き上げてきたもの全てを流し去ってしまうような場所でした。幸いサケなどの川からの恵みは豊かでしたが、自然の猛威が容赦なく生命・財産を奪う厳しい時代でした。

出身地の在来農法は全く通用せず、開拓が成功するかどうかは個人の能力や努力だけでなく選択した土地の状況や天候などの運不運にも左右されました。初期の入植者の3分の2ほどは10年を待たずして流亡・離散したといわれており、開拓の歴史の大半は、記されることもない、離散者・離脱者の歴史でもあるのです。

## 土壌改良資材の登場 ～高台の火山性土の開墾～

北海道の中ではやや遅れ気味でしたが、十勝においては、明治30年前後に入植を促す制度が整い、その後10年ほどの間で道路や鉄道が相次いで開通したことを契機に、開拓民が次々と押し寄せるようになりました。

急増した入植者が新たに開墾したのは、それまで敬遠されてきた広大な高台で、それを可能にしたのは化学肥料(過磷酸石灰)の施用と畜力によるプラウ耕という新しい技術の普及でした。過磷酸石灰を施用して土壌を改良(酸性矯正・燐酸補給)することで火山灰土壌でも正当な収穫を上げることが可能となり、また、畜力により広大な面積の耕作が可能となったため、生産性が飛躍的に向上したのです。凶作や水害が度々発生したものの、特に大豆は、移出農産物の主体として作付が急増し、この頃から十勝の主要作物となりました。

また、鉄道の開通により輸送費が大幅に低減したことに加えて小樽の市場との結びつきが強くなったため、農民が豆の相場を気にするようになり、投機的農業の兆しが見え始めました。

こうして、内地の水田中心の農業とは異質の、換金作物の販売を基本とする商業的畑作農業を基盤とした、独特の地域社会と文化が創造されたのです。

## 豆類に偏重した商業的・投機的な作付 ～略奪農業による地力減退～

明治40年頃から昭和10年頃までの十勝では、移出品目である豆類に作付が偏重していました。豆類は商品的価値が高く、十勝発展の大きな要因になったことは事実ですが、冷害に弱く作柄が

安定しないため、投機的な性質を持つ一面がありました。

大正3年(1914年)に始まった第一次世界大戦に伴う特需は、十勝の農業にも空前の好景気をもたらしました。作付の大半を占めていた大豆に代わり、インゲン・エンドウや馬鈴しょ澱粉の価格暴騰を受けて、欧州本国やその植民地向けの輸出品目としてそれらの生産を選択的に拡大させたことで、それまで貧しかった十勝の農民の中から、豆成金・澱粉成金と呼ばれる人たちが出現したのです。

しかし、大正6年に大戦が終結すると、次の年には豆景気はあっけなく去り、物価は下落しました。凶作・水害がそれに追い打ちをかけ、また、大豊作の年は農産物価格がさらに暴落し、夜逃げ・自殺・身売りなどの悲惨な状況が数多く発生しました。また、大正期以降、日露戦争の結果日本が自治権を獲得した満州への移住の本格化に伴い十勝への入植が停滞し、大豆の生産も満州と競合して価格が低下したため(満州は当時世界最大の大豆輸出「地域」でした)、農業生産の拡大が鈍化しました。

この頃、豆類連作による地力の減退が次第に現れてきましたが、この時期にはまだ移住農民の土着の心が薄く、先祖伝来ではない土地を単なる生産手段と見なして一攫千金の再来を夢見る人が多く、地道な対策をとるよりも前年の凶作を挽回しようと輪作を無視して商業作物に偏重した投機的耕作を繰り返す(昭和初期の豆類作付比率は6割以上)、そのことがさらなる生産性低下の要因となって結果的に凶作を受けやすくなるという悪循環を引き起こしました。

それでも、油脂や肥料の原料としての需要が根強かった大豆を中心とした欧州や米国などへの輸出は我が国の重要な外資獲得手段として続けられ、しばしば活況を呈しました。そしてこのような状況の下、景気の良いときにも浮かれ過ぎずに堅実な投資で足下を固め、進取の気性をもって試行錯誤と努力によって苦しい時代を乗り切った人たちが、次の時代を切り開いていったのです。

なお、世界恐慌により日本経済が苦境に陥り、アジアに活路を見出そうとして発生した満州事変の一年前、昭和5年(1930年)には、当時の世界のブロック経済化の流れの中で、米国が自国内の大豆生産者を保護する目的で輸入関税を引き上げ、満州・日本産大豆の米国向け輸出が激減しました。その後大豆の作付を大幅に増やした米国からの圧力により、昭和36年(1961年)には大豆が輸入自由化となり、米国からの輸入量が増大し、十勝の大豆作付は激減しました。

十勝産の大豆は、米国の保護貿易により国際的な市場を奪われ、米国の圧力により国内市場も奪われた、という見方も可能です。

## 略奪農業からの脱却を目指して ～戦前・戦中における試行錯誤～

十勝では、それまでは永住する必要がなく移転・離散を繰り返して共同的思想にも乏しかったのが、大正末期頃からは条件の良い開拓地が残り少なくなるにつれて簡単に移動できなくなったため、次第に秩序ある新しい地域社会が形成され、地力を維持しようという機運が高まってきました。また、換金作物である豆類偏重の弊害が顕著となり、昭和初期の経済恐慌と相次ぐ冷害凶作で極度に疲弊する中、寒冷地作物を導入した輪作・緑肥・有畜農業などが推進されました。

しかし、昭和12年に再び戦争の時代を迎えると、徐々に生産資材が不足し、とりわけ化学肥料の不足により農業生産力は次第に減退していきました。また、徴兵による労力不足と広大な面積の農耕に欠かせなかった馬の徴用がそれに拍車をかけ、援農や内地からの疎開者の入植が盛んに行われましたが、終戦までに約30%(5万8千ha)もの耕作放棄地が発生しました。

一方で、軍需物資の生産拡大のために国策により行われた亜麻〔軍服等〕やえん麦〔軍馬の飼料〕の作付けの割り当てが連作を招き、略奪農業の継続を助長しました。

戦時中、肥料不足を補うため、地力維持を目的として暗渠排水が行われましたが、農民は従来肥料に頼っていたため、工事施工後3～4年経って効果が現れる土地改良の成果が理解されづらく普及しなかったという記録があります。

かくして戦時下の食料増産のかけ声の下、農業生産は低下の一途をたどったのでした。

## **農地改革と土地改良法 ～戦後の土地改良事業の最初の一步～**

昭和22年の農地改革（自作農創設特別措置法・改正農地調整法）により、不在地主の割合が比較的高かった十勝においても多くの新たな自作農が出現しましたが、居住地から遠く耕作に苦慮するような、小作時代と異なる実情に合わない農地が割り当てられることも多かったです。

このような状況の下、十勝では、昭和24年に制定された土地改良法に基づく交換分合が積極的に推進されました。分散していた農地を集約したことで、家族経営を基本としながらも効率的な十勝農業の足がかりとなったのです。

## **戦後の入植地 ～条件不利地への新規入植の顛末～**

終戦直後、食料増産と引揚者・復員軍人・戦災者の救済の目的で緊急開拓事業が国策として推進され、新たな開拓民が続々と各地に入植しました。しかし、そこであてがわれた土地は、既存農家が敬遠した地味の悪い未墾地や手放した土地（耕作放棄地）などの営農条件の悪いところがほとんどで、農業経験のほとんど無い者が多かったこととあいまって戦後開拓は困難を極めました。戦災を逃れて入植したものの慣れない農業で心身ともに疲れ果て、その末に発生した家族内殺人や無理心中などの悲惨な事件もいくつか記録されています。

その後、傾斜生産方式導入により鉱工業が再建されるにつれ、新規入植による人口吸収の必要性が薄れて昭和22年をピークに新規入植者は減少し、また、食料増産の手段としては、未墾地の開拓から土地改良による生産性の向上へと徐々に重点が移行していきました。

昭和30年代以降、都市における労働力需要の高まりに加え、厳しい自然環境や度重なる冷害（昭和28・29・31年）によって、戦中からの疎開者も含む新規入植者の多くが農業に見切りを付けて離農し（昭和34年までに入植者の3分の1以上が脱落離農〔全道のデータ〕）、その農地は、厳しい時代を生き抜き、全国に先駆けた機械化により規模拡大が可能となった農家に引き継がれたのでした。

## **赤いダイヤ ～投機的農業の再来と終焉～**

昭和26年に雑穀の価格統制が廃止されると、再び豆類の作付けが増加し、昭和30年代には11万haを超え、戦前同様、農地面積の6割以上をも占めました。中でも小豆は冷害に弱い故に価格変動が大きく、「赤いダイヤ」とも称されて投機的農業の対象となりました。

しかし、昭和36年の大豆の輸入自由化や昭和39年の未曾有の冷害を契機に豆類の作付けは減少に転じました。この頃、トラクターの普及により深耕が可能となったことや化学肥料が豊富に使えるようになったこと、排水改良によって根菜類等の作付けする条件が整ったこと、てん菜等の栽培技術が確立されたことなど、入植以来続けられてきた地力収奪的な農業手法を反省し、てん菜・馬鈴しょ・小麦などを導入した畑作4品による適正な輪作体系へ移行する条件が、ようやく

く整ったのです。

現在、十勝の豆類は、小豆・大豆・いんげんを主体に2万5千haほどの作付ですが、生産量の全国シェアは、小豆は5割以上、いんげんは8割弱にも上っています。

## 本格的な土地改良の実施とその効果 ～冷湿害の克服と生産性の向上～

高度成長期に入ると都市への労働力の流出に拍車がかかり、農家戸数の減少に伴い、規模拡大と機械化が大きく進展する中、十勝における本格的な土地改良事業がはじまりました。それまでの土地改良事業は主に水田が対象だったため、当時の北海道の畑地における土地基盤は水田に比べて著しく立ち後れており、土地改良無くしては規模拡大と機械化は不可能でもありました。

特に昭和36年に農業基本法が制定された後は、新たな事業制度が相次いで創設され、機械化と土地改良が車の両輪を成して猛烈なスピードで推進されました。

湿性土壌が全耕地面積の約半分を占める十勝において、地力を回復し、冷湿害に強い農業を確立するために第一に必要なのは、排水改良でした。当時はまだ原始河川が多く残されていました。排水路を掘削することで広大な湿地や原野が沃野に生まれ変わり、暗渠排水により地下水位が低下することで寒冷地作物であるビート・馬鈴しょの作付拡大が可能となったのです。

経営面積が大きい農家が散在している十勝にあっては農作業や農産物搬入のための農道が不可欠であり、農耕馬・馬車からトラクター・トラックへの転換と競うように整備が進みました。また、昭和43年度の「畑地帯総合土地改良事業」の創設以降、暗渠排水はもとより石礫除去や客土、区画整理、火山性土の土壌改良なども盛んに行われ、生産性は格段に向上しました。

冷湿害に弱い豆類の作付割合が後退し、コンバインの普及に伴う集団作付によって省力化の進んだ小麦の激増、輪作体系の確立と有機物施用技術の普及による地力向上、肉用牛の激増、乳牛・野菜の振興、品種改良・営農技術の向上など、生産基盤の整備との相乗効果で急速に体質が強化され、製糖・乳業・澱粉・製菓などの加工業や農業機械工業などの関連産業の発展ともあいまって、農業生産は大幅に拡大しました(昭和60年の農業粗生産額は昭和35年の約1.1倍)。また、水道・集落道などの生活環境整備にも投資されるようになり、生活水準も著しく向上しました。

それまで後進的と見なされてきた十勝はまさに嵐のような変革を遂げ、昭和50年代には冷害に強いわが国の代表的な畑作、酪農地帯に生まれ変わりました。以前ならば壊滅的な打撃を受けるような天候であっても、農業経営全般で見ればある程度の収穫を確保できるようになったのです。

その後も排水改良を中心に着実に整備を進めており、ナガイモ・馬鈴しょ・大根・枝豆などのブランド化の成功にもつながっています。特にナガイモでは、導入するほ場の暗渠排水の設計基準を弾力的に運用して管を通常よりも深く(1.2m)埋設することで作付拡大と品質向上を図り、近年、輸出が急増しています。

現在の十勝は、35万あまりの人が住み、約400万人を養える食料をカロリーベースで供給する地域に発展し、今後も自律的に発展できる基盤が確立されています。このこと自体が長い年月をかけて形成された貴重な国富であり、土地改良(農業農村整備)の最大の効果であると言えるでしょう。



かつて「赤いダイヤ」と称された小豆  
現在は安定生産が可能となり、  
生産量の全国シェアは約5.2%



機械化によって急速に作付が拡大した小麦  
生産量の全国シェアは約2.4%

## おわりに ～豊かな時代が到来し、土地改良は次のステージへ～

言うまでもなく、土地改良に求められる整備水準は時代によって、地域によって異なります。農を切り開いた先人たちの中には、周囲に理解されず変人扱いされたにもかかわらず信念を貫きとおし、現在でも立派に通用する施設・技術などをつくりあげた例が数多くあります。それでは、暖衣飽食の現在において行わなくてはいけない土地改良とはどのようなものでしょう？

昭和年代、冷湿害の常襲地帯である十勝の地に、畑地かんがい導入されました。「無駄だ」と言う声もありましたが、現在、排水改良が進むにつれ、「どんな天候でも収量と品質が確保できる全天候型のほ場」の要求が強まり、新たな導入が進んでいます。

また、人口が希薄なこの地域に、道東自動車道の整備が着々と進められております。「無駄だ」と言う声もありましたが、平成24年には、地元の悲願であった帯広-札幌間の全面開通後、「飛躍的に交流人口が増加」し、今後のさらなる地域活性化が確実視されています。

現在のニーズを満たすだけでは、行政の責務を果たしたとは言えません。現在の多くの人が必要と感じているものが100年後の人たちにも同様に必要とされるとは限らず、逆に将来必要とされるものであっても、現在の空気の中では「無駄だ」と決めつけられかねません。行政、特に農業に関わる我々が行うインフラ整備は先見の明が無くては無意味なのです。

豊かになった現在においても時代を先取りした整備が必要であり、それは可能であると考えております。徹底した低コスト化あるいは集約化のために必要なものは何か、さらなる高付加価値化のために必要なものは何か、将来有望な農業技術を活かすためには何が必要か。ITを駆使した精密農業や農作業の自動化、超大型ハウスなどはある程度想像できますが、おそらく私などには思いもよらないものが将来求められ、多元的に高度化が進んでいくのでしょうか。それは短期・経済的な観点に基づく現在の尺度では十分評価されないものなのかもしれません。

それでも次代を見据えて必要な投資を行うことは、先人たちが開拓に従事したことに始まって失敗を重ねながらも様々なインフラを膨大な資産として残してくれたおかげで今があるように、豊かになった私たちに課せられた将来世代へのプレゼントなのです。

以上、馬産や亜麻、乳業、肉牛、製糖、澱粉、限界地における稲作などに係る重要な記述を省きながらも、大まかに十勝農業の歴史を振り返ってみました。

亜寒帯の寒冷な気候風土の中で、欧米の技術も積極的に取り入れながら、冷害や水害、病虫害と闘い、さらに国内だけではなく海外の農産物の価格などとも競争を強いられる、苦難の歴史を

刻みながら培われた鋭い市場センスが、現在のブランド化や海外輸出増につながっているのだと思います。取り巻く状況が厳しいことには違いありませんが、今後も十勝農業が国内外の消費者の皆さんに支えられながら力強く発展していくことと確信しております。